

## グリム童話と『日本の昔ばなし』の比較

—条件結婚について—

### Ein Vergleich der Märchen der Brüder Grimm mit den japanischen Märchen über die Heirat zur Belohnung für die Erfüllung einer Bedingung

太田 伸 広

**要旨：**ある条件を満たして結婚する条件結婚には、出された課題を解いて結婚する課題成就結婚と理想の結婚相手としてあげた条件にかなえば結婚するという単なる条件結婚の2種類がある。課題成就結婚は難題解決結婚と共通する点が多いが、大きな違いは、課題成就結婚では、課題を解くのは主人公自身であるが、難題解決結婚では、難題を解くのは、主人公ではなく、異界の存在や異界からの贈物であり、この面に限れば主人公は脇役だということである。課題成就結婚では、王様、殿様とお姫様が登場し、王様、殿様が結婚の条件（課題）を出し、課題を成就した者に、その褒美として、お姫様を嫁としてやるという構造になっている。

#### はじめに

グリム童話と『日本の昔ばなし』を条件結婚に焦点を当てて比較する。分析の対象は、グリム童話の場合は、1857年の決定版のKHM200篇、203話で、日本の昔話の場合は、関敬吾氏編集の『日本の昔ばなし』（岩波文庫）第I、第II、第III巻の240話である。

結婚は、その種類と類型の両面から分析することにする。種類とは、恋愛結婚、難題解決結婚、魔法からの解放結婚、政略結婚、等々である。類型であるが、異なる結婚、例えば、恋愛結婚と難題解決結婚であっても、王家（殿様家）の男と王家（殿様家）の女の結婚ということでは同じ型の結婚であり、それを結婚の類型と呼ぶことにする。王家（殿様家、高貴な身分）の男と王家（殿様家、高貴な身分）の女の結婚を類型1、王家（殿様家）の男と庶民の女の結婚を類型2、庶民の男と王家（殿様家）の女の結婚を類型3、庶民同士の結婚を類型4とする。類型は神様と人間の結婚（神と神、神と女、男と神）、人間と動物の結婚（男と動物、動物と女、動物同士）、人間と物（男と物、物と女）の組み合わせで、類型12までである。

条件とは、謎解きのような比較的簡単な課題で、それを果たせば結婚させてやる、というように、それが結婚の条件になっていることを意味する。それは、ガラスの斧で森のすべての木を一日で伐採するとか、部屋一杯の藁を一晩で金の糸に紡ぐというように、およそ人間がやり遂げることが不可能か、不可能に近い難題とは違う。そのような条件を満たし、花嫁や花婿をもらうのが条件結婚である。

グリム童話には、そのような条件結婚は全部で10篇ある。類型1が1篇、類型2が2篇、類型3が5編、類型4が1篇、類型10が1篇である。類型10は動物同士の結婚である。『日本の昔ばなし』には、条件結婚は1話しかない。

これから、グリム童話の条件結婚を類型別に具体的に見ていくことにする。

グリム童話のテキストは、BRÜDER GRIMM Kinder-und Hausmärchen Vollständige Ausgabe Mit 184 Illustrationen zeitgenössischer Künstler und einem Nachwort von Heinz Rölleke Artemis & Winkler 1949 Winkler Verlag, München, 19. Auflage 1999 である。参考にした訳は、金田鬼一氏の『グリム童話集』（岩波書店）である。

## 第1章 グリム童話の条件結婚

### 第1節 類型1の条件結婚

類型1の条件結婚は『なぞなぞ (Das Rätsel)』（KHM22）だけである。

むかし昔、一人の王子があった。王子は忠臣を一人連れて旅に出た。そしてある大きな森へ入り込み、宿を探していると、若くて美しい (jung und schön) 娘が小さな家の方へ歩いていくのを見つけた。宿を頼むと、娘は「中へお入りにならないで。」「私の養母は悪い術を使うのです。meine Stiefmutter treibt böse Künste,」と言った。王子は別に怖いとも思わず、中へ入っていった。すると、老婆 (魔女) は赤い目で (mit ihren roten Augen) じろっと王子達を見た。老婆は毒を入れた飲物を家来の所へ持って来て、お前の主人にあげるようにと言った。そのとたんに、コップが破裂し、毒が馬に飛び散り、馬は死んでしまった。すると、鴉が一羽馬に止まり、馬の肉を食べた。家来は鴉を殺してお土産に持っていった。一日中歩き回ったが、森から出ることはできなかった。しかし、ある宿屋を見つけ、そこに泊まることにした。ところが、そこは人殺し達の隠れ家 (eine Mördergrube) であった。十二人の人殺し達は、王子達を殺す前に、宿屋にやって来ていたあの魔女 (die Hexe) と一緒に鴉のスープを飲み、全員死んでしまった。

王子達は長い間旅を続けた後、ある都へやって来た。ここの王女は美しいが、自惚れが強く (eine schöne, aber übermütige Königstochter)、「私に解くことのできないようななぞなぞを出す者がいたら、私のお嬢さんにしてあげよう。wer ihr ein Rätsel vorlegte, das sie nicht erraten könnte, der sollte ihr Gemahl werden:」しかし失敗すれば首をもらう、という御触れを出していた。「王子は王女の余りの美しさに目が眩み、それに命を賭けようとした。als der Königsson anlangte und, von ihrer großen Schönheit geblendet, sein Leben daransetzen wollte」そして王女に「ある人が誰も殺さないのに、十二人を殺しました。それはどういうことでしょう。‘was ist das,’.....‘einer schlug keinen und schlug doch zwölf.’」と謎を掛けた。王女は答えがさっぱり分らなかった。そこで、王女は、王子が寝ているところへ行き、寝たふりをした王子の寝言から答えを導き出した。そして裁判を開き、謎を解いたことを証明しようとしたが、王子に証拠を挙げて真相を暴露され、裁判で負け、王子と結婚することになった。

このように、王子と王女の結婚は、誰か王女が解くことが出来ない謎を出すことが出来たなら、その者をお嬢さんにしてあげるという約束通り、謎掛けて勝った王子が負けた王女をお嫁さんにもらったのであるから、条件結婚である。王子は王女に一目惚れであるが、王女は最後まで王子のことを何とも思っていない。否、裁判を開いて勝つことを望み、王子の首を取ろうとしたくらいであるから、王女は王子が好きではないと言える。二人の結婚生活が幸か不幸かは不明である。このメルヘンには父王は登場せず、王女は「私に解くことのできないようななぞなぞを出す者がいたら、私のお嬢さんにしてあげよう。」というように、自ら結婚の条件を

出す。王女の強い意志と独立した人格は顕著であり、いわば王女の一人舞台で、王女は王様のように振舞っている。しかし、十二人の裁判官はその王女でさえ裁く。

## 第2節 類型2の条件結婚

類型2の条件結婚は『賢い農民の娘 (Die kluge Bauerntochter)』(KHM94)と『つむ(紡錘)と杼(ひ)と縫い針 (Spindel, Weberschiffchen und Nadel)』(KHM188)の2篇だけである。

まず最初は『賢い農民の娘』である。むかし昔、貧乏な農民があり、娘が一人いた。二人は王様からいただいた芝草の土地で、純金の乳鉢 (einen Mörsel von purem Gold) を見つけた。乳鉢だけでは意味がありません、乳棒 (den Stößer) も探して持っていかなければなりません、という娘の忠告を、父親は無視し、それを王様の所へ持っていった。王様は、乳棒を見つけて持ってくるまで、牢屋にいろと言って、農民を牢屋へ入れた。農民が、残念、娘の忠告を聞けばよかった、と言って悔しがり、牢屋で断食していることを聞いた王様は、そんなに賢い娘がおるなら連れて来い、と言った。娘が連れて来られると、王様は「わしがお前に一つなぞなぞを出す。うまく解ければ、お前と結婚してやろう。er wollte ihr ein Rätsel aufgeben, wenn sie das treffen könnte, dann wollte er sie heiraten.」と言って、謎を掛けた。それは「服を着ず、裸にならず、馬に乗らず、車に乗らず、道を通らず、道の外に出ず、わしの所へやって来い。Komm zu mir, nicht gekleidet, nicht nackt, nicht geritten, nicht gefahren, nicht in dem Weg, nicht außer dem Weg,」というものであった。娘は難なくその謎を解いた。そして父を牢屋から出してもらい、娘は王様のお后様になった。

それから何年か経って、ある農民の馬が子馬を生んだことがあった。ところが、その子馬が2頭の牛の真ん中に座り込んだ。牛の持ち主は、子馬欲しさに、この子馬は雌牛が生んだと主張した。農民は私の馬が生んだのだと言って、争いになった。王様は、馬の子は馬の子が座っているところに帰すべきだという裁定を下した。馬の子を取られた農民に泣きつかれたお后様は、農民に王様の裁定を覆すような入れ知恵をした。王様はそのことを知り、怒って、お前の最も大切に最も良いと思うもの (das Liebste und Beste....., was sie wüßte) を持って実家に帰れ、と三行半を出した。お后様は、お別れの杯をすと言い、王様に眠り薬を飲ませ、眠った王様を自分の家に運んだ。目を覚ました王様が、訳を尋ねると、お后様は、王様より大切に良いものはございません、と答えた。王様は感激し、改めて御婚礼をやり直した。

このメルヘンも『なぞなぞ』と同じく謎解きである。農民の娘が王様の出した謎を解き、王様のお嫁さんになったのであるから、娘と王様の結婚は条件結婚である。王様のお后様になった農民の娘は、王様のことをどう思っているのか結婚するまで分らないが、結婚後は明らかに「最も大切に最も良い (最愛の最良の)」人と思っている。王様も、結婚後心底からお后様を大切に思っている。二人の結婚生活は幸せそうである。『なぞなぞ』では、王女が自分に解けないような難しい謎掛けをする者があれば、お嫁さんにしてやる、と言い、このメルヘンでは、王様が謎掛けをし、解くことができれば、お嫁さんにしてやる、と言っている。相違は、男性と女性が入れ替わっていること (前者では、条件を出すのが王女でそれに応ずるのが王子、後者では、条件を出すのが王様でそれに応ずるのが農民の娘)、そして前者では王家同士の結婚だが、後者は王家と庶民の結婚だということだけである。この『賢い農民の娘』でも、謎を解くのに異次元の世界からの援助を必要としていない。

次はKHM188の『つむ（紡錘）と杼（ひ）と縫い針（Spindel, Weberschiffchen und Nadel）』である。

むかし昔、両親に先立たれた女の子がいた。この子は、「名付け親（seine Pate）」の「おばあさんによってとても信心深く育てられた。Die Alte... erzog es in aller Frömmigkeit.」

「女の子が15歳になったとき、おばあさんは病気になり、子供を枕元へ呼び Als das Mädchen fünfzehn Jahre alt war, erkrankte sie, rief das Kind an ihr Bett」、つむと杼と縫い針（Spindel, Weberschiffchen und Nadel）を渡し、「胸の中には神様だけをしまっておくのですよ。そうすると、幸せになれるからね。behalt nur Gott in dem Herzen, so wird dir's wohl gehen.」と言い、「目を閉じた。Darauf schloß sie die Augen,」それからは、おばあさんの言ったとおりで、自分の織物がよく売れて、お金が貯まり、人に施し物をするくらいになった。

この国の王子が国中からお嫁さんを探していたが、お嫁さんになれる人の条件は、「最も貧しいと同時に最も豊かな人 die soll meine Frau werden, die zugleich die ärmste und die reichste ist.」ということであった。

ある時、王子が娘の家の前にやってきて、窓から娘を見たことがあった。「娘は、王子が中をのぞいているのに気づくと、顔が真っ赤になり、目を伏せ、糸を紡ぎ続けた。als es bemerkte, daß der Königssohn hereinschaute, ward es über und über rot, schlug die Augen nieder und spann weiter;」王子が馬に乗って行ってしまくと、「王子の帽子の白い羽が見えなくなるまで、ずっと王子の後を見つめていた。es blickte ihm nach, solange es noch die weißen Federn an seinem Hut erkennen konnte.」そして「つむよ、つむよ、外へ行って、お婿さんを私の家へ連れてきて！Spindel, Spindel, geh du aus, bring den Freier in mein Haus.」と言うと、つむはドアから外へ出て行き、王子に追いついた。王子はそれを見て驚き、「金糸をたどってもどってきた。drehte sein Pferd um und ritt an dem goldenen Faden zurück.」そして杼は外で美しい絨毯を織り上げ、縫い針が「稲妻のように素早く部屋の中をあちこち飛び回り die Nadel... flog in der Stube hin und her, so schnell wie der Blitz.」きれいに飾り付けをした。「王子は馬からおり、絨毯の上を通過して家の中へ入ってきた。Er stieg ab, schritt über den Teppich in das Haus herein,」そして、「お前は最も貧しく、また最も豊かな娘だ Du bist die ärmste und auch die reichste,」と言って、王子が「私と一緒においで、おまえを私のお嫁さんにしてあげよう。komm mit mir, du sollst meine Braut sein.」と言うと、「娘は黙ったままであったが、王子に手を差し出した。Sie schwieg, aber sie reichte ihm die Hand.」王子は娘にキスをし、お城へ連れて帰り、結婚の式を挙げた。

「つむとひと縫い針は御宝蔵におさめられ、大変大事に扱われた。Spindel, Weberschiffchen und Nadel wurden in der Schatzkammer verwahrt und in großen Ehren gehalten.」

王子と娘の結婚は、王子が「最も貧しいと同時に最も豊かな人」という王子の結婚の条件にあった娘を探し当てて結婚したので、条件結婚である。王子は自分の結婚相手の条件を出しているだけで、別に娘に恋愛感情を抱いている訳ではない。その証拠に王子は娘を見ても、通り過ぎてしまう。ところが、娘の方は、顔を「真っ赤に」し、つむに「お婿さんを私の家へ連れてきて」と言う。これは王子に一目惚れした娘の王子への一方的な求愛行動である。とはいえ、相手は王子である。娘は庶民で、地位は低く、そのうえ女性である。自分の方から結婚を申し出る訳にはいかなかったのであろう。つむ（紡錘）に頼んで、王子を引き寄せ、王子の結婚条件に自分が合うかどうかを王子に判断してもらおう行動に出る。引き返してきた王子は、娘が

「最も貧しく、また最も豊かな娘だ」ということに気づき、娘と結婚する。このようにして、やっと娘の願いが叶うのである。したがって、娘に一方的な恋愛感情はあるものの、娘の「一方的」な恋愛結婚ではない。

このメルヘンでは、珍しく、王子と結婚する庶民の女性が「美しい schön」と形容されていない。敬虔な娘が奇蹟の連続で幸運をつかむというストーリーからして、娘の美は必要なかったのであろう。しかし、娘は「美しい」という言葉では形容されていないものの、「娘は（貧乏人のような）みすばらしい服装を着て立っていたが、藪の中の一輪の薔薇のように輝いていた。（, stand das Mädchen da in seinem ärmlichen Kleid, aber es glühte darin wie eine Rose im Busch.）」と描写されているので、娘のイメージは美しい。2人の結婚生活が幸か不幸かは、まったく描かれていないので、不明である。

### 第3節 類型3の条件結婚

最初は『ぞっとすることを覚えるために旅に出たある男のメルヘン (Märchen von einem, der auszog, das Fürchten zu lernen)』（KHM4）である。

あるところに父と息子二人がいた。長男は利口で、末っ子は馬鹿で何一つ覚えられなかった。そこで父は、末っ子に何かものを覚えさせ、一人立ちさせようと、旅に出した。末の息子は、ぞっとすることを覚えたくて旅に出た。

最初は教会に預けられた。教会用務員 (der Küster) は、彼に夜中に鐘を撞くように言っておいて、彼をぞっとさせようと思い、幽霊 (ein Gespenst) の格好をして現れたが、階段から突き落とされ、足を折ってしまった。そのため息子は教会から追い出された。

しかたなく、息子は旅に出た。ある宿屋に着いたところ、主人が「ここからそう遠くない所に呪われたお城がある。そこで三晩だけ見張りをする腹積もりなら、ぞっとするとはどんなことか、きっと覚えられるよ。王様は、そうする勇気のある者にお姫様をお嫁さんにやると約束されておられる。nicht weit davon stände ein verwünschtes Schloß, wo einer wohl lernen könnte, was Gruseln wäre, wenn er nur drei Nächte darin wachen wollte. Der König hätte dem, ders wagen sollte, seine Tochter zur Frau versprochen,」と言った。息子は、王様の御前に出て、三晩寝ずの番を致します、と申し上げた。息子は王様から許された三つの物、火 (ein Feuer)、旋盤 (eine Drehbank)、短刀付きの彫刻台 (eine Schnitzbank mit dem Messer) を持って、夜お城へ出かけて行った。

真夜中に突然大きな黒猫が二匹 (zwei große schwarze Katzen) 飛び出てきて、火のような目で睨んだ。トランプ遊びをしようと言った猫を、息子はまず長い爪を切ることが先決だと言って騙し、猫の足を彫刻台のねじで止め、殴り殺した。すると、焼けた鎖に繋がれた黒猫と黒犬 (schwarze Katzen und schwarze Hunde an glühenden Ketten) が沢山出てきた。息子は全部短刀で切り殺し、外の池に放り込んだ。それらはお化け (die Gespenster) であった。この後、寝台に横になると、寝台が回転したり、飛んだり、逆さまになったりしたが、息子は平気であった。

二晩目は、真夜中になると、煙突から人間の体が半分 (ein halber Mensch) 落ちてきて、後から落ちてきた半分と一緒に、恐ろしい男 (ein greulicher Mann) になった。それから次々と男が落ちてきて、骨を九つ (neun Totenbeine)、頭蓋骨を二つ (zwei Totenköpfe) 持って玉転がし (九柱戯) を始めた。息子も興味を示し、頭蓋骨を旋盤で丸くし、遊びに興じた。

男たちは、十二時の鐘の音と同時にすべてが姿を消した。息子は賭けたお金は損したが、平気であった。

三晩目は、六人の大男が棺桶を担いでやってきた。息子が棺桶を開け、死人を暖めてやると、生き返った。しかし、それが息子を襲ってきたので、息子はそれをまた棺桶の中に放り込み、蓋をした。すると今度は、長い白い髭を生やした恐ろしい形相をした（fürchterlich）大男がやって来た。男が襲いかかってくると、息子は力比べをしようともちかけ、隙を突いて、男の長いひげを金敷（Amboß）に打ち込み、鉄棒（eine Eisenstange）で殴りつけた。爺さんは命乞いをした。十二時を打つと、その魔物（der Geist）は消え失せた。

翌朝王様が来られ、「お前はお城を呪いから解いた。よってわしの娘と結婚させてやる。du hast das Schloß erlöst und sollst meine Tochter heiraten.」と言われた。息子は「それはどう見ましても誠に結構なことでございます。でも、ぞっとするということがどんなことか未だに分りません。Das ist all recht gut, ..... aber ich weiß noch immer nicht, was Gruseln ist.」と答えた。そしてお城の地下室から黄金が持ち出され、結婚式がとり行われた。

「若い王様は、お后様を大変愛し、また非常に楽しく暮らしていたが、der junge König, so lieb er seine Gemahlin hatte und so vergnügt er war,」いつもいつもぞっとしたい、ぞっとしたい、と言っていた。お后様もこれを聞くのが嫌になった。そこで、侍女が小川に行って、桶に小魚（Gründlinge）ごと水を汲み、お城に持って帰った。そして夜若い王様が眠っている時、お后様がその桶の冷たい水を王様にぶっかけた。小魚が王様の体のまわりでびちびちはねると、王様は「おっ、ぞっとする、ぞっとする。」と言った。

さて、このメルヘンの馬鹿息子とお姫様の結婚は、少々分類が厄介である。呪われたお城で三晩寝ずの番をすれば、お姫様をお嫁さんにやる、という条件を満たして、馬鹿息子がお姫様と結婚したのであるから、これは条件結婚である。しかし、その呪われたお城には、悪霊たちが番をしており（von bösen Geistern bewacht）、今までに多くの者がそこに入って行ったが、帰って来た者はまだ一人もいない（Schon viele wären wohl hinein-, aber noch keiner wieder herausgekommen.）、というのであるから、命がけで三晩続けて寝ずの番をするというのは難題とも言える。とは言うものの、悪霊たちの中身を見ると、トランプをする頓馬な猫や通常の犬であったり、死体であったり、九柱戯をして遊ぶものであったり、少々間抜けな大男の爺さんであったりと、生きて帰った者がいないという割には、それらはあるし、恐ろしいというよりも、どこか抜けたところがあり、滑稽味さえある。これは、息子がぞっとする体験をしたいがために、教会用務員扮する幽霊に出くわしたり、七人の死体がぶら下がっている首吊り台のところで夜を明かしたりすることと大して変わりがなく、その延長線上にある。いずれもこの地球上の人間がやり遂げることが困難か、不可能というほどの難題ではない。そこで、息子とお姫様の結婚は条件結婚に分類する。ただし、この分類に関しては、あらゆる分類に伴う、境界線上の困難さと曖昧さがあることは否定できない。ついでながら、これは魔法からの解放結婚のようにも思われるが、解放した（erlösen）のはお城（宝物）であって、お姫様ではない。お姫様は、呪われてもいないし、魔法をかけられてもいない。それゆえ、これは魔法からの解放結婚ではない。

息子がお姫様をもらう条件をクリアする上で、異次元の世界からの援助はない。何も知らない、何も分らないということは、恐いものがないということであるが、そういう馬鹿息子の無知に起因する勇気が息子を恐ろしい体験に駆り立てたのであり、それが困難な条件をクリア

させたのである。

このメルヘンでは、「お姫様はお日様が照らし出す中で最も美しい乙女だ。die wäre die schönste Jungfrau, welche die Sonne beschien:」と、お姫様の美しさが随分強調されているが、息子が呪われた城で三晩寝ずの番をしたいと申し出たのは、その美しいお姫様をもらうためではなかった。ぞっとする体験をしたい一心で申し出たのである。だから、お姫様をもらうことのできる条件を満たした後でも、息子は、お姫様を下さい、とは一言も言っていない。王様から「わしの娘と結婚させてやる」と言われた時、息子は「それはどう見ましても誠に結構なことでございます。」と答えているが、それは、美しいお姫様をもらうことで、目的を達成したからではない。お姫様をもらうことは、息子にとっては、あくまでも地下室の宝の黄金をもらうことと同じく、ぞっとする体験をするための冒険において、降って湧いた幸運、行き掛けの駄賃に過ぎない。だから、息子はその言葉に続けて、「ぞっとするということがどんなことか未だに分りません。」と言ったのである。以上のように、結婚後は話は別であるが、結婚するまでは、息子はお姫様に対して関心を持っているようには見えない。お姫様は、条件を満たしたことへの褒美であり、人格も意志も感情もないモノに等しい。もちろん、馬鹿息子のことは何とも思っていない。しかし、二人の結婚生活は幸せそうに見える。ところが、幸せなのは若い王様（息子）だけであり、若いお后様が幸せかどうかは分らない。なぜならば、Da ward das Gold heraufgebracht und die Hochzeit gefeiert, aber der junge König, so lieb er seine Gemahlin hatte und so vergnügt er war, sagte doch immer ‘wenn mir nur gruselte, wenn mir nur gruselte.’ と、若いお后様のことは一切書かれてないからである。

第2は、『三枚の蛇の葉 (Die drei Schlangenblätter)』(KHM16) である。

むかし昔、ある男があり、息子が一人いたが、貧しくてもう養うことができなくなった。息子は、何とか自分で食べていこうと思って、世の中へ出て行った。そして若者は (der Jüngling)、戦争をしているある王様に奉公することになった。若者は、敗走しかかった軍隊を鼓舞し、その国を勝利に導いた。王様は若者を褒め称え、宝物を沢山やり、若者を国で一番偉い位につけた。

王様にはお姫様が一人あった。このお姫様は、「自分が先に逝った時、生きたまま自分と一緒に墓に入ると約束しない者は、自分の主人・夫にはしないという誓いをたてていた。Sie hatte das Gelübde getan, keinen zum Herrn und Gemahl zu nehmen, der nicht verspräche, wenn sie zuerst stürbe, sich lebendig mit ihr egraben zu lassen.」理由は、私を心から愛しているなら、私亡き後の生活（命）は意味がなくなるからというものであった。その代わり、逆の場合、お姫様も同じことをするというのであった。このため、多くの者が尻込みしたが、「若者はお姫様の美しさに心を奪われ、他の事は何も考えず、父王にお姫様を下さいと申し出た。der Jüngling wurde von ihrer Schönheit so eingenommen, daß er auf nichts achtete, sondern bei ihrem Vater um sie anhielt.」父王にお姫様の誓いのことを確認されると、若者は「私の愛は、危険などものともしないほど大きいのです。meine Liebe ist so groß, daß ich der Gefahr nicht achte.」と答え、お姫様のお供をして墓に入ることを誓った。それで、王様は結婚を承諾し、結婚式が盛大に執り行われた。

亡くなったお姫様のお供をして墓に入るというのは、結婚の条件としては厳しいものであるが、条件であることに変わりはない。もっとも、命を賭けるほど厳しい条件とはいっても、この場合は心底から惚れた人に命をかけるという愛情問題である。それは、命を賭けた化物退治

とか、命を賭けた巨人征伐とは、同じ命を賭けるといっても、少々意味が違う。命をかけた愛は、死んでもいいくらい愛しているということであり、愛と生が一致している。愛がすべてで、愛（の対象）がなくなれば、それは即生の終焉、死を意味するからである。だから、この場合の条件とは、愛のために死んでもいいという程度である。そういう条件を若者は喜んで飲み、お姫様と結婚したのであるから、二人の結婚は条件結婚である。

若者がお姫様に首っ丈なのはよく分る。しかし、お姫様が若者をどう思っているかは、結婚するまではよく分らない。若者が戦争で国を滅亡の危機から救い、王様に次ぐ地位にまで出世した勇敢な功労者であるにもかかわらず、娘のお姫様は若者に何の反応も示さない。さらに若者がお姫様自身の出した条件を飲んで結婚したいと申し出ても、お姫様自身の反応はない。これでは、お姫様は若者に何の興味も関心も持っていなかったと判断せざるをえない。結婚後は、「彼らはしばらくの間幸せにお互いに満足して（楽しく）暮らしました。Nun lebten sie eine Zeitlang glücklich und vergnügt miteinander,」とあるように、幸せである。ところが、若いお后様は、病気で死んでしまう。しかし、約束を守って一緒に墓に入った夫の若い王様に、三枚の蛇の葉で生き返らせてもらった。それにもかかわらず、お后様は船頭との不倫（eine böse Neigung zum Schiffer）に走り、夫を殺して、船頭との結婚を父王に申し出る。これは明らかにお姫様（若いお后様）の不貞である。このことについて、このメルヘンでは、お姫様に心変わり（eine Veränderung）があったと書かれている。しかし、「心変わり」という表現は、お姫様が結婚し、二人が幸せな生活を送っていたことを意図してのことだとは分るが、もともとお姫様には若者への愛情などなかったのであるから、筋の統一性から見て、若干問題があろう。ついでながら、不貞をはたらいたお姫様には、「神を信じない（無神論の gottlos）」という、グリムらしい最も厳しい人間否定の形容詞が付けられている。

第3は『勇敢な仕立屋さん（Das tapfere Schneiderlein）』（KHM20）である。

仕立屋さんが農婦からジャム（Mus）を買い、パンに塗って仕事をしていた。すると、蠅が沢山止まった。怒った仕立屋さんは、布切れで蠅を叩いた。すると、七匹が死んでいた。そこで、仕立屋さんは自分の勇敢さを世界に知らせるために、帯に「一撃で七匹！siebene auf einen Streich!」と縫い、世界へと旅立っていった。

仕立屋さんは、山上で出会った巨人たちをへこました後、ある王宮の庭に（in den Hof eines königlichen Palastes）やって来て、疲れたので芝生の上で寝ていた。寝ていた仕立屋さんの帯を見た家来たちは、王様にあの偉大な勇士（der große Kriegsheld）を雇うように申し入れた。こうして、仕立屋さんは王様に仕えることとなった。ところが、兵士たち（Kriegsleute）はあの勇士にはかなわないと思い、辞表を出した。困り果てた王様は、勇士（仕立屋）のところに使いをやり、森にいる「二人の巨人を征伐し殺したら、王様のたった一人の娘を妻としてやりし、持参金として王国を半分やる。Wenn er diese beiden Riesen überwände und tötete, so wollte er ihm seine einzige Tochter zur Gemahlin geben und das halbe Königreich zur Ehesteuer;」と伝え、仕立屋さんを厄介払いすることを思いついた。

仕立屋さんは、喜んで巨人征伐に出かけて行った。森の中へ入って、巨人を探すと、二人とも木の下で寝ていた。仕立屋さんは木の上に登り、木の上から巨人の一人に石を落とした。相手が殴ったと思った巨人は、相手に食ってかかったが、相手は知らないと言った。二人はまた寝た。今度はもう一人の巨人に石を落とした。巨人はもう一人に食ってかかったが、知らないと言われたので、二人はまた寝た。今度は大きな石を落とすと、二人は喧嘩を始めた。二人は木



を引き抜き、殴りあった。そして二人とも死んでしまった。仕立屋さんは二人の胸に剣を二～三度突き刺してから帰って行った。

ところが、王様は約束の褒美 (die versprochene Belohnung) をくれようとはしなかった。そして森の中の一角獣 (ein Einhorn) を捕まえることが先決だと言った。仕立屋さんが森へ出かけると、一角獣が仕立屋さんを狙って突進してきた。仕立屋さんは一角獣がすぐそばへ突進して来るまで待ち、すばやく身かわし、木の後ろに隠れた。それで一角獣は仕立屋さんではなく、木に角を突き刺した。そこで、仕立屋さんはそれを王様に持って行った。

しかし、王様はこれでも約束の褒美 (den verheißenen Lohn) をくれなかった。王様は、森の猪 (ein Wildschwein) を捕まえてからだ、と言った。仕立屋さんは、自分めがけて突進してくる猪を礼拝堂 (eine Kapelle) の中へ誘導して生け捕りにした。

ついに王様は約束を守り、お姫様を仕立屋さんにするに決めた。結婚式がとり行われた。結婚後、若いお后様は夫の寝言から、夫が仕立屋であることを知り、父王に夫を追放して欲しいと頼んだ。しかし、仕立屋さんは、父王たちの襲撃を頓知で退け、王様になった。

仕立屋さんが、巨人征伐、一角獣と猪退治という課題を果たし、結婚条件を満たして、お姫様をお嫁さんにもらったのであるから、二人の結婚は条件結婚である。ただし、この分類にも境界線上の困難さがつきまとう。巨人征伐や一角獣と猪退治はそう簡単な課題ではないからである。場合によっては、この地上の人間にはやり遂げることが不可能かもしれない。しかし、この巨人たちは、上から落ちてきた石を、相手の殴り打ちと違って、お互いに死ぬまで喧嘩をするという、どこか滑稽で愚かなところがあり、単なる頓知でやっつけられる存在である。一角獣や猪にしてもそうである。自分の角を木に突き刺して動けなくなったり、ただ突進するだけで、教会堂の中にはまり込んで、出られなくなったり、機知さえあれば、やっつけられる存在と言える。それゆえ、これらを征伐することは地上の者がやり遂げることが不可能な難題というより、課題と考えた方が適切であろう。

仕立屋さんはお姫様をどう思っているのでしょうか。「二人の巨人を征伐し殺したら、王様のたった一人の娘を妻としてやるし、持参金として王国を半分やる。」と王様に言われたとき、仕立屋さんは「それはお前のような者にびつたりの仕事だ。美しいお姫様と王国を半分なんていつもいつもらえるものではない。Das wäre so etwas für einen Mann, wie du bist, eine schöne Königstochter und ein halbes Königreich wird einem nicht alle Tage angeboten.」と思った。このように、仕立屋さんはお姫様をもらうことは、大変ありがたいことと思っているが、それは王国を半分もらうことと同じかそれより少し大きな喜びに過ぎない。ここでは「一撃で七匹！」と勇敢さを売り物にしている仕立屋さんのこと、巨人征伐が格好の腕試しだったに違いない。その武勲の褒美に、おまけとして美しいお姫様と王国を半分ももらえるのだから、その喜びの中身は十分推測できる。つまり、お姫様への若者の気持ちは、お姫さまへの愛情とかいう類のものではない。お姫様というこの上ない褒美をもらう喜びに過ぎない。それが証拠に、自分を追い出そうとしたお姫様の策略を粉碎した後、お姫様がそばにいるにもかかわらず、Also war und blieb das Schneiderlein sein Lebtag König. と、王様になった仕立屋さんの暮らしぶりが描かれているだけで、実にそっけない。お姫様は完全に無視されている。ましてや、お姫様と一緒に楽しく暮らしましたなどという、グリム童話によくあるハッピーエンドの言葉などここでは問題にすらならない。『ぞっとすることを覚えるために旅に出たある男のメルヘン』の男の目的が、お姫様の美しさが非常に強調されているにもかかわらず、そのお姫様との結婚では

なく、ぞっとする体験であったのと同様、このメルヘンの仕立屋さんの目的も自分の勇敢さを試すことであり、お姫様をもらうことが仕立屋さんの直接の目的ではなかった。したがって、お姫様の美しさが仕立屋さんの心を動かすことにはならなかったし、困難な課題に仕立屋さんを駆り立てる最大の動機にもならなかった。

お姫様の方は、仕立屋さんを何とも思っていない。というより、結婚後、仕立屋さんの氏素性を知ったお姫様は、父王に頼んで、夫である仕立屋さんを追い出そうとしたくらいであるから、仕立屋さんが嫌いなのである。

父王は家父長的に振舞い、娘を褒美としてやるというように、実の娘をモノ扱いするが、モノ扱いされたお姫様には、嫌なものは追い払うというほど強烈な意志と激しい感情があるし、身分の卑しい者とは結婚しないという明確な考えもある。最後に、二人の結婚生活に関してであるが、妻のお姫様が夫を追い出そうとしたのであるから、二人の結婚生活は恐らく不幸、もしくは不幸でないにしても、不和であろうが、結婚後の二人の生活ぶりが描かれていないので、幸か不幸か不明である。

第4は『歌を歌う骨（Der singende Knochen）』（KHM28）である。

昔ある国で、猪の被害に困っていた。そこで、王様は「猪を捕まえるか殺した者に、たった一人の娘を妻としてやる。wer das Wildschwein einfange oder töte, solle seine einzige Tochter zur Gemahlin haben.」という御触れを出した。

その国のある貧乏な男の息子二人がその冒険（das Wagnis）を買って出た。兄は高慢さから（aus Hochmut）、弟は善良な心から（aus gutem Herzen）申し出た。弟が東から森に入ると、小さな小人（ein kleines Männlein）に出くわした。小人は「この槍をお前にやろう。お前の心は無垢で善良だからだ。これがあればお前は安心して猪に立ち向かっていける。猪はお前に危害を加えることはないよ。diesen Spieß gebe ich dir, weil dein Herz unschuldig und gut ist: damit kannst du getrost auf das wilde Schwein eingehen, es wird dir keinen Schaden zufügen.」と言って、黒い槍（einen schwarzen Spieß）をくれた。弟は小人にお礼を言って先へと進んでいくと、猪が突進してきた。槍を突き出すと、猪は槍に向かって突進し、真っ二つに割れた。それを担いで、森の西側に出ると、兄は森に入らず、入り口の家で酒を飲み踊っていた。猪を担いだ弟を見ると、兄は嫉妬心に駆られ、小川の橋の上から弟を突き落として殺し、橋の下に埋めた。そして王様からお姫様をもらった。

それから長い年月が経ち、ある羊飼いが橋の下の小さな骨を見つけ、角笛の歌口にした。そして笛を吹くと、兄が殺して橋の下に埋めたと、笛が歌を歌った。羊飼いは不思議に思い、この奇妙な笛は王様の所へ持っていかなければならないと考えて、お城へ行った。そして王様の前で角笛を吹いた。すると、笛はまた、兄が自分（弟）を殺して橋の下に埋めたと、歌を歌った。それで、王様に兄の犯罪がばれた。兄は袋に縫い込まれ、生きたまま水の中へ沈められた（lebendig ersäuft）。

兄とお姫様の結婚は、兄が猪退治をした弟を殺して、自分が猪を退治し、弟は猪に殺されたという嘘をついてお姫様をもらった詐欺の結婚であるが、虚偽とはいえ、形式的には猪退治というお姫様をもらう条件を満たしたうえでの結婚であるので、条件結婚である。兄がお姫様に好意を抱いていたかどうかは、叙述がないので分らない。しかし、話の流れからすると、貧乏な家に育った兄は「高慢」で、豊かになりたくて、弟を殺すという犯罪におよんだと思われる。したがって、お姫様をもらうことは、豊かになる、つまり王様になるための手段であり、お姫

様の人柄など考慮の外にあったに違いない。弟は兄と正反対である。しかし、弟も「善良な心」から、猪を退治して災厄をなくしようとしたのであって、お姫様に好意を抱いて、お姫様をもらおうとして冒険に立ち向かったのではない。お姫様の方はといえば、「彼（兄）は王様の娘を妻にもらいました。Worauf er die Tochter des Königs zur Gemahlin erhielt.」という表現があるだけで、お姫様が猪退治に向かった兄弟をどう思っているかはまったく分からない。否、メルヘンの最初に seine einzige Tochter、そして最後の方に die Tochter des Königs という言葉が出てくるだけで、お姫様はこのメルヘンでは実質的には登場していない。つまり、お姫様は登場人物ではない。勇敢な行為に対する単なる褒美の品物に過ぎない。相手が殺人鬼の兄であろうと、父王の御触れどおりに結婚させられている。換言すれば、お姫様は手柄を立てたと思われる者にくれてやる贈りモノなのである。もちろん意志も感情も人格もない。

第5は、『機転の利く仕立屋さん (Vom klugen Schneiderlein)』(KHM114)である。

むかし昔、物凄く尊大な（自信過剰の gewaltig stolz）お姫様があった。「お姫様は、誰でもかまわない、自分の掛ける謎を解く者がいたら、結婚をしてあげる、という御触れを出した。Sie [eine Prinzessin] ließ auch bekanntmachen, wer ihr Rätsel löste, sollte sich mit ihr vermählen, und möchte kommen, wer da wollte.」お姫様をもらおうと思って男たちが次から次へとやってきたが、どの「求婚者もあざ笑って追い返された so ward er [ein Freier] mit Spott fortgeschickt.」最後に三人の仕立屋さんがやって来た。お姫様の掛けた謎は、お姫様の二種類の髪の毛の色であった。二人が失敗し、残るは一人になった。三人目の仕立屋さんは、銀色と金色と見事に言い当てた。「これを聞いたお姫様は真っ青になり、驚きの余りもう少しで倒れるところであった。Wie die Prinzessin das hörte, ward sie blaß, und wäre vor Schrecken beinah hingefallen,」

お姫様は仕立屋さんを厄介払いし（loswerden）ようと思って、小屋の中で熊と一緒に一晩過ごさなければ、私と結婚することはできない、と言った。仕立屋さんは、胡桃と石をすり替えて、熊に石をかじらせたり、バイオリンを弾いて熊を踊らせたりした後、爪を切ってやると言って、前足を出させ、万力（ein Schraubstock）でそれを挟み、朝まで寝た。ついにお姫様は逃れることができなくなり、父王の用意した馬車で教会へ行くこととなった。他の二人の仕立屋は幸せを奪おうとして、熊を放した。熊は小さな仕立屋さんとお姫様を追いかけてきたが、仕立屋さんが逆立ちをし、この万力が見えないかと叫ぶと、熊は逃げて行った。それから二人は教会で結婚した。

さて、二人の結婚であるが、仕立屋さんが謎解きをして、お姫様との結婚の条件を満たし、事件はあったものの結局は結婚したのであるから、二人の結婚は条件結婚である。仕立屋さんが謎を解いた後、お姫様が仕立屋さんに、熊のいる小屋で一晩過ごせ、と難題を出したのは、嫌な仕立屋さんを厄介払いする（熊に殺させる）ためであった。二人の結婚は、条件結婚から難題解決結婚への移行のようにも見える。しかし、これは事実上の結婚を阻止しようとした企みに過ぎない。しかも、その中身を見ると、仕立屋さんの機転も光るとはいえ、熊は、石をかじったり、バイオリンの演奏にあわせて踊ったり、バイオリンを弾こうとしたり、万力の前足を挟まれたり、仕立屋さんの逆立ちした足を万力と見間違えたりと、随分滑稽な存在であり、熊と一緒に小屋で過ごすことがこの地上の人間に不可能な難題のように思われぬ。だから、お姫様との結婚の条件に、熊と一緒に一晩過ごすという課題を含めたとしても、お姫様と仕立屋さんの結婚は、難題解決結婚という訳にはいかない。条件結婚である。もっとも、これも分類というものに必然的に伴う境界線上の微妙な問題ではある。

小さな仕立屋さんは、お姫様をもらおうとしたが、別にお姫様が好きだからではない。運（Glück）を試すことが、あくまでも仕立屋さんの謎解き挑戦の動機である。もちろん、お姫様をもらうことが、何のとりえもない仕立屋さんにとって、最大の幸運、最高の幸せになるための必須の条件であることは言うまでもない。

お姫様は、仕立屋さんが謎を解き、結婚せざるを得なくなっても、熊に仕立屋さんを殺させようとしたし、翌朝には、仕立屋さんが熊に殺されたと思い、まったく心配がなくなり満足して（ganz unbesorgt und vergnügt）起きたとあるように、最後まで仕立屋さんを嫌っている。結婚後も仕立屋さんは楽しく（満足して）暮らしたとあるが、お姫様の方の叙述はない。

二人の結婚生活であるが、「仕立屋さんは、荒野の雲雀のように、お姫様に満足して（お姫様相手に楽しく）暮らしました。und lebte er [mein Schneiderlein] mit ihr vergnügt wie eine Heidlerche.」と書かれてあるように、仕立屋さんが幸せなのはよく分る。しかし、そこにお姫様の叙述がないことから分るように、好きでもなく、殺そうと試みた仕立屋と結婚せざるを得なかったお姫様が幸せであったかどうかは分らない。したがって、二人の結婚生活は、幸せに近いが、不明である。このメルヘンでは、小さな仕立屋さんと並ぶもう一人の主役はお姫様であり、父王は事実上登場しない。王様は馬車を呼び寄せた（der König ließ den Wagen kommen,）だけであり、何の役割も演じていない。意味があるとするれば、結婚を最後まで渋るお姫様を、馬車を呼んで教会へ行かざるを得なくしたことであろう。

このメルヘンでは、お姫様を形容するのに「美しい」という言葉は一度も使われていない。

#### 第4節 類型4の条件結婚

類型4の条件結婚は一つしかない。それは、『賢いエルゼ（Die kluge Else）』（KHM34）である。

むかし男があった。彼には娘がいた。娘は賢いエルゼと呼ばれていた。両親が娘を嫁にやろうとしていた時、ちょうどハンスがやって来て、エルゼをお嫁さんに欲しいと申し出た。ただし、「賢いエルゼが本当に分別があるなら、という条件 er machte aber die Bedingung, daß die kluge Else auch recht gescheit wäre.」付きであった。みんなで食事をした後、母親の言いつけでエルゼが地下室へビールを取りに行った。ビールを注いでいると、頭の上につるはし（eine Kreuzhacke）がぶら下がっているのが見えた。エルゼは、ハンスと結婚すると子供ができる、子供は大きくなる、大きくなった子供にビールを取りに行かせると、つるはしが落ちてきて死んでしまう、と言って、泣き出した。帰って来ないエルゼを迎えに行ったお手伝いさん（die Magd）は、エルゼから泣いている理由を聞き、「なんて賢いエルゼなんでしょう was haben wir für eine kluge Else!」と言って泣き出した。二人を呼びに行った下男（der Knecht）も賢いエルゼに同情して泣いた。3人を呼びに行った母親も泣いた。4人を呼びに行った父親も泣いた。事情を聞いたハンスは「わが家の家事にこれ以上の分別はいらない。お前はこんなにも賢いエルゼなんだもの、お前をもらうよ。mehr Verstand ist für meinen Haushalt nicht nötig; weil du so eine kluge Else bist, so will ich dich haben,」と言った。そしてエルゼと結婚式を挙げた。

ハンスから畑仕事に行くように言われたエルゼは仕事もせず、弁当を食べて寝ていた。しばらくしてエルゼは目が覚め、家に帰り、「ハンス、エルゼは家にいる？ Hans, ist die Else drinnen?」と聞くと、ハンスは「はい、彼女は家にいるよ」と答えた。驚いたエルゼは他の家にも行ってみ

たが、受け入れてくれる人はおらず、村から出て行った。その後彼女を見た人は誰もいない。

ハンスとエルゼの結婚は、ハンスが出した分別のある者という結婚の条件をエルゼがクリアして、ハンスのお嫁さんになったのであるから、条件結婚である。ハンスは、結婚する気持ちはあるであろうが、エルゼと結婚したいかどうかは、よくわからない。ただ、笑話ながらも、エルゼがハンスの結婚の条件を満たしていると思なされたので、ハンスには結婚の意思があるとみなさなければならない。エルゼも結婚する気持ちはあるように思われるが、それは結婚一般への意思であって、別にとりたてて嫁探しに来たハンスと結婚したいと思っているようには見えない。むしろハンスと結婚させたがっているのは、エルゼの両親である。もちろんハンスに好意を持っているようには思えない。ハンスもエルゼに好意はない。二人の結婚生活は、ハンスがエルゼを家から追い出したのであるから、不幸である。

### 第5節 類型10の条件結婚

類型10の条件結婚は『狐夫人の結婚式 (Die Hochzeit der Frau Füchsin)』(KHM38)の第2話 (Zweites Märchen) である。

年老いた狐の主人が死んでからというもの、未亡人の狐夫人に次々と求婚者が現れた。狼、犬、鹿、兎、熊、ライオンと、森の動物たちすべて (alle Waldtiere) がやって来た。しかし、それらの動物が「赤いズボン (rote Höslein)」をはいておらず、また「とんがった口 (ein spitz Maulchen)」をしていないので、みんな肘鉄を食らわされた。最後に、赤いズボンをはき、とんがった口をした若い狐がやって来た。それで、狐夫人は若狐を上にあげた。そして結婚式がとり行われた。

未亡人の狐夫人の結婚の条件は、赤いズボンをはき、とんがった口をしていることであった。狐夫人は、その条件にあった若い狐と結婚したのであるから、両者の結婚は条件結婚である。両者の結婚生活が幸か不幸かは不明である。

## 第2章 『日本の昔ばなし』の条件結婚

『日本の昔ばなし』の条件結婚は二つある。『鬼の妹』と『怪我の功名』である。しかし、『怪我の功名』は夢のお話で、現実には結婚していないので、実際は『鬼の妹』ただ一つである。

「お父さんとお母さんとぼっくわ (兄) とあせっくわ (妹) とが」あった。「あせっくわとぼっくわはいつも一つ布団に寝てい」た。「ところがぼっくわが眠ると、あせっくわはそとに出て行って、夜明けごろに帰って来るときは、いつも冷たくなって布団のなかに入って来」た。「ぼっくわはふしぎでたまらないから」「ある夜」「あせっくわの後からついて行」った。すると、「牧場に」「放ってある牛を横だきにして血をすいはじめ」た。「妹と思っていたのは鬼」だった。「鬼があせっくわを食ってしまって、妹に化けているのだと思って、ぶるぶるぶるえながらもどって来」た。

「その翌日、ぼっくわ」は、「両親に『あせっくわは鬼だから早く追いださないと、いまにみんな食われますよ』とい」った。「ところが両親はたいそう怒って、『このたわけ者が…あんなおとなしい妹をそんなにいうなら、お前出ていけ』と、」逆に叱られた。「ぼっくわは『仕方ありません』といっ、て、出て行」った。

「村を歩いていると、子供たちが蚊を竹の筒の中に入れて苦しめている」た。ぼっくわが「お前たちはどうしてそんなかわいそうなことをするんだ、わしにその蚊を一銭で売ってくれ」と言うと、子供たちは「喜んで売って」くれた。ぼっくわは「『お前たちはあんな悪い者につかまってはいかんよ、逃がしてやるから、その代わりおれが困ったときには助けてくれよ』と言って、逃がしてや」った。

「つぎの村に行くと」、「大きな虎がい」て、「涙を流して、ぼっくわに頭を下げてい」た。「虎の側にいって見ると、脚に釘がたってい」た。「釘を抜いてやると、虎はおとなしく、ぼっくわについて行」った。

「またつぎの村に行」くと、「あちこちに貼札がしてあ」った。「その札には、『殿さまの蔵の中に入っている穀物が何俵あるか、いいあてた者を聳にする』と書いてあ」った。「『さて何俵ぐらいあるだろう』とっていると、蚊がたくさん飛んで来て、『千俵千俵』と鳴」いた。ぼっくわは「殿さまのところへ出かけて行って、『蔵には俵が千俵ある』といいあて」た。「殿さまは約束どおりぼっくわを聳にした。「虎にもきれいな家をつくってやり、金網を張って育て」た。

一年後、ぼっくわは父母の安否が気になり、島（故郷）に帰った。ところが、島には人間が一人もいなかった。あせっくわが出て来て、流行病で村の人はみんな死んだと言った。すると、白と黒の鼠になった両親が、あせっくわは鬼だ、村人をみんな食ってしまった、わしらも食われた、早く逃げろと言った。ぼっくわは馬を置いて逃げ、あせっくわが馬を食っている間に、松の木に登ったが、あせっくわに見つけられ、捕まりそうになった。すると、虎がやって来て「あせっくわの首に喰いついてかみころし」た。

この昔ばなしでは、「殿さまの蔵の中に入っている穀物が何俵あるか、いいあてた者を聳にする」という謎掛けをぼっくわが解いて、お姫様をお嫁さんにもらったのであるから、ぼっくわとお姫様の結婚は典型的な条件結婚である。

『鬼の妹』の殿様は、穀物が蔵に何俵あるかという謎を解いた者に、娘を褒美としてやっている。その態度はまったく家父長的であり、お姫様の気持ちも感情も意思もあったものではない。結婚するまで、また結婚したときも、お姫様という言葉さえ登場しない。あるのは「聳にする」とか「聳にし」たという言葉だけである。この言葉によってわれわれ聞き手がお姫様の存在を推測しているに過ぎない。描写の面からも、お姫様とお姫様の人格は完全に抹殺されている。お姫様は、謎解きに対して、褒美として与えられる単なるモノとして扱われている。結婚後1年くらい経ってから、「妻」という言葉がようやく登場するが、それも虎の檻の蓋を開ける役割を演ずるためののみである。ところが、鬼を喰い殺し、主人公を助けた虎は、「きれいな家をつくって」もらう。そして話の最後でも「それからぼっくわは虎をつれて帰り、末長く虎を養ったということです。」と、虎との生活は語られるが、お姫様との生活は一言も語られない。虎の人格、否虎の虎格は尊重されているが、妻の人格はまったく存在しないも同然である。妻は虎以下である。もっとも、お姫様が話の筋から完全にはじき出されているのは、この昔ばなしの主なストーリーが鬼の妹とぼっくわの闘いだからではある。

以上のことからして当然といえば当然であるが、お姫様は、謎解きの褒美の品物であり、聳となるぼっくわに対して、何の感情も抱いていない。感覚すらない。ぼっくわの方もお姫様を何とも思っていない。ぼっくわがお姫様をもらおうとしたというより、助けてもらった蚊が、思案しているぼっくわに、恩返しとして、穀物の俵数を勝手に教え、結果として、ぼっくわを

愛情を感じている訳でもないお姫様に結びつけたのである。したがって、この昔ばなしでは、お姫様は、ほっくわの最高の出世、最大の成功を保証する、最も大きな褒美の品物であると同時に、動物の恩返しのお礼の品、それも最高のお礼の品物となっている。ほっくわと虎との生活は幸せそうであるが、お姫様との生活が幸せかどうかは不明である。

以上の条件結婚の特徴を表にまとめてみると、以下のようになる。

グリム童話												
類型	メルヘン 昔話	条件	条件を出す人	条件を満たす主人公			褒美として与えられる人			父（王） の態度	結婚 生活	条件を満たす 際の異界の存在や贈り物
				地位 身分	動機	結婚への意志 と感情	地位 身分	結婚への意志 と感情	容姿と結婚 の関係			
1	なぞなぞ 22	王女に謎掛け	王女	王子	王女の美しさ	有る	王女	無し (嫌い)	美しい 有る	登場しない	不明	無し
2	賢い農民の娘 94	謎解き	王様	農民の娘	不明 (否応なく)	不明	王様	不明 (有りそう)	(男性) 無関係	不明	幸せ	無し
	紡錘と杵と縫い針 188	最貧で最豊の人	王子	貧しい娘	結婚願望	有る	王子	有るが、恋愛感情ではない	不明 無関係	登場しない	不明	紡錘と杵と縫い針
3	ぞっとすることを体験する男 4	呪われた城で三晩見張りをする	王様	馬鹿息子	ぞっとする体験をしたいため	無いに等しい	お姫様	無し	美しい 無関係	家父長的	不明	無し
	三枚の蛇の葉 16	お姫様の生費になる	お姫様	貧乏息子	お姫様の美しさ	有る	お姫様	無し (夫を殺す)	美しい 有る	家父長的でない	不幸	無し
	勇敢な仕立屋さん 20	巨人征伐（一角獣と猪退治）	王様	仕立屋	勇猛さの腕試し	無いに等しい	お姫様	無し (嫌い) (追放を図る)	美しい ほぼ無関係	家父長的	不明 (ほぼ不幸)	無し
	歌を歌う骨 28	猪退治	王様	貧乏息子 (兄)	高慢さ	有る	お姫様	無し	不明 無関係	家父長的	不幸	黒い棺
	機転の利く仕立屋さん 114	謎解き（熊と一晚過ごす）	お姫様	仕立屋	運試し	不明 (有りそう)	お姫様	無し (嫌い) (殺害を図る)	不明 無関係	家父長的でない	不明 (ほぼ不幸)	無し
4	賢いエルゼ 34	賢さ	ハンス	エルゼ	不明（親の意向）	不明 (有りそう)	ハンス	有る	(男性) 無関係	家父長的でない	不幸	無し
10	狐夫人の結婚式 38	赤いズボンとがった口	狐夫人	若い狐	結婚するため	有る	狐夫人	有る	不明 無関係	登場しない	不明	無し
『日本の昔ばなし』												
3	鬼の妹	謎解き	姫様	ほっくわ	不明	不明 (有りそう)	お姫様	無し	不明 無関係	家父長的	不明	蚊

### 第3章 グリム童話と『日本の昔ばなし』の条件結婚の特徴と相違

条件結婚の特徴を考察する前に、条件結婚の中身を見ておく必要がある。一口に条件結婚といっても、よく見ると、その中身がかなり違うからである。一つは、類型4の『賢いエルゼ』と類型10の『狐夫人の結婚式』と類型2の『紡錘と杵と縫い針』である。もう一つは、類型1の『なぞなぞ』と類型3の『ぞっとすることを覚えるために旅に出たある男のメルヘン』、『三枚の蛇の葉』、『勇敢な仕立屋さん』、『歌を歌う骨』、『機転の利く仕立屋さん』および類型2の『賢い農民の娘』である。前者の類型4『賢いエルゼ』では、ハンスが娘エルゼと結婚する場合に出した条件は、分別である。類型10の『狐夫人の結婚式』では、狐夫人が再婚したい相手は、赤いズボンをはき、とんがった口をしている動物である。それが結婚の条件である。類型2の『賢い農民の娘』では、王子が結婚したい相手は、「最も貧しいと同時に最も豊かな人」である。これが王子の結婚の条件である。これらの条件は、お見合い結婚の場合に理想の結婚相手の条件として挙げる、相手の家柄、学歴、趣味、容姿、年取のようなものであり、結婚相

手に何の努力も勇気も要求しない、いわば結婚の単なる条件である。ところが、後者の類型1の『なぞなぞ』と類型3の5篇では、お姫様をもらうことのできる条件は、解くことのできない謎を掛けること、呪われた城で三晩見張りをすること、お姫様の生け贄になること、巨人征伐、猪退治、謎解きであり、類型2の『賢い農民の娘』でも、お后様になれる条件は、王様の出した謎を解くことである。つまり、後者の条件は、「もし～をしたら、姫をやる」とか「もし～をしたら、后にしてやる」というように、何らかの課題をやり遂げることとなっている。いわば、課題成就結婚である。したがって、条件結婚には、単なる条件結婚と課題成就結婚の二種類があることになる。単なる条件結婚が3話で、課題成就結婚が8話で、課題成就結婚が多い。後者の課題成就結婚は、「難題を解決したら、姫をやる」、「難題を解決したら、后にしてやる」という、難題を解決することが結婚の条件となっている難題解決結婚とよく似ている。違いは、条件をクリアすることが比較的簡単な単なる課題か、地上の人間には解決が不可能なような難題かということだけである。だからといって、条件結婚の課題成就結婚を難題解決結婚の方に分類することは適当ではない。中身を見ると、両者には大きな相違があるからである。

その難題解決結婚は『日本の昔ばなし』にはまったくないが、条件結婚も『日本の昔ばなし』には非常に少ない。たった一話しかない。ただ『日本昔話大成』には条件結婚が（課題成就結婚も）かなりあるので、日本昔話の特徴として、条件結婚が少ないことを挙げることはできない。これに対して、難題解決結婚は『日本昔話大成』にも一話もない。これは日本昔話の特徴であり、謎でもある。

さて、条件結婚の分析を課題成就結婚に限定するならば、次のような特徴があらわれる。

第1に、王様もしくは殿様が登場する。例外は『なぞなぞ』だけである。

第2に、その最高権力者の王様もしくは殿様が結婚の条件を出す。王様が登場しない『なぞなぞ』では、王女が自らの結婚の条件を出す。これは、王女が最高権力者の地位にある王様の役割を果たしていると考えれば、例外とは言えない。例外は、『三枚の蛇の葉』と『機転の利く小さな仕立屋さん』である。両者とも、王様がいるにもかかわらず、お姫様が自ら結婚の条件を出す。しかし、後者では、王様は登場してはいるが、お姫様の結婚の時に、王様は馬車を呼び寄せただけで、実際は登場していないのと同じである。この両者に共通して言えることは、王様に代わって、お姫様が自らの結婚の条件を出すだけあって、王様の影が薄いことである。もう少し言えば、王様にまったく家父長的なところがなく、王様が娘の意思を全面的に尊重していることである。したがって、お姫様はまるで王様がいないかのごとく、思い通りに振舞っている。このようなことは、課題成就結婚とよく似ている難題解決結婚ではありえない。

第3に、課題成就結婚では、お姫様も登場する。登場しないのは、『賢い農民の娘』だけである。このメルヘンでは、王様が条件（謎掛け）を出し、農民の娘が謎を解くことができれば嫁にしてやるという王様と庶民の娘の類型2の結婚であるから、お姫様が登場しないのは当然のことである。

第4に、そのお姫様が条件を満たした者に妻として与えられる。例外は同じくお姫様の登場しない『賢い農民の娘』だけである。

第5に、お姫様は、条件を満たしたこと、つまり課題をやり遂げたことへの褒美、褒賞である。しかし、最高の褒美、褒賞である。

第3、第4、第5の例外は、『賢い農民の娘』だけである。このメルヘンは、すでに述べたよ



うに、王様が謎を出し、謎が解ければわしの妻にしてやるというものだからである。『三枚の蛇の葉』と『機転の利く小さな仕立屋さん』も一見すると、例外のように見えるが、これらのメルヘンも、自分が死んだ時に生贄になると約束する人でなければ「自分の主人・夫にはしない」、「誰でもかまわない、自分のかける謎を解く者がいたら、結婚してあげる」というように、お姫様が自分の結婚の条件を出しているだけで、別の視点から見れば、条件を満たす人に、自らを妻として与える、自らをその褒美としてやるということで、話の構造という点では、第3、第4、第5の特徴と同じである。違いは、お姫様自身に主体性があること、他人つまり王様や殿様から褒美としてやると言われていないだけである。

第6に、王様（父）とお姫様が登場する限り、お姫様は、もちろん『日本の昔ばなし』も含めて、父王によって意思も感情も人格もない単なるモノとして扱われる。このことは、第2の特徴と第4の特徴と第5の特徴の論理的連関から、必然的に導き出されてくる筈であるが、グリム童話の場合は、事柄はそう単純ではない。『三枚の蛇の葉』では、お姫様は、父王がいるにもかかわらず、自分が死んだ時一緒に墓に入る者でないと夫にはしないと言って、自分の結婚相手について自ら条件を出す。『機転の利く小さな仕立屋さん』でも、お姫様は、自分の出した謎を解く者がいたら結婚してあげると言う。王様は娘の結婚に際して、馬車を呼び寄せただけであり、王様の影はきわめて薄い。よく注意していないと、王様がいることにすら気がつかないくらいである。この二人のお姫様は、自分の結婚は自分で決定するという主体性と自立性を持っており、父王から決してモノ扱いされてはいない。『三枚の蛇の葉』のお姫様などは、浮気をするという奔放な主体性さえ持っている。『なぞなぞ』の王女も「私に解くことのできないようななぞなぞを出す者がいたら、私のお婿さんにしてあげよう。」と言って、自ら結婚の条件を出す。この王女にも主体性があり、自立していて、決して単なるモノではないが、父の王様が登場しないので、例外とは言えない。『勇敢な仕立屋さん』に登場するお姫様も、夫が身分が卑しいこと（仕立屋）を知り、自らの意志で、夫を追放しようと試みているように、単なるモノにとどまっておらず、主体性があるが、こと結婚に関しては、父王の言いなりで、課題を遂行した仕立屋に褒美の品として与えられている。この他に、お姫様が完全にモノ扱いされたままにとどまっているのは『ぞっとすることを覚えるために旅に出たある男のメルヘン』と『歌を歌う骨』である。

そうすると、グリム童話では、王様とお姫様が登場する話は、課題成就結婚話7話の内5話（すべて類型3に属する話）で、その内2話、結婚後のことも考慮に入れば、3話もお姫様に独立した意志や考え、感情、人格があるので、お姫様が父王によってモノ扱いされないどころか、お姫様に自立性と主体性があるというのが、グリム童話の課題成就結婚の特徴であると言った方が的を射ているであろう。

これに対し、『日本の昔ばなし』では、条件結婚は『鬼の妹』たった一つしかないが、その話では、お姫様は、蔵の中に穀物が何俵あるかという殿様の出した謎を解いた者にくれてやる。そのお姫様には意思も感情も人格のかけらもない。お姫様は、殿様の謎掛けを解いたばっくわと結婚したはずであるが、お姫様が結婚するまで、また結婚したときも、お姫様という言葉さえない。あるのは「聳にする」とか「聳にし」たという表現だけである。この昔話を聞くわれわれが、そういう言葉から、お姫様の存在を単に推測しているに過ぎない。それほどまでに、お姫様の人格は抹殺されている。極端なまでのモノ扱いである。これは、たった一つの例しかなく、統計上普遍化することはできないが、『日本の昔ばなし』の恋愛結婚における女性の自

私の覚醒のなさ、自立性のなさ、一言で言えば、女性が家の利害の下で完全に沈黙させられていることと考え合わせると、『日本の昔ばなし』の特徴の一つと言ってよいであろう。グリム童話で、お姫様が完全にモノ扱いされている『歌を歌う骨』でさえ、その話には、少なくとも王様の娘とかお姫様という言葉くらいはある。ついでながら、『日本の昔ばなし』の恋愛結婚では、男も家の支配に対して無力である。

第7に、父王（従って娘のお姫様）が登場する課題成就結婚で、娘をモノのように扱う家父長的態度を取るメルヘンは、グリム童話の場合、5話中3話で、家父長的でないメルヘンが2話である。課題成就結婚と似ている難題解決結婚の場合には、難題を課す王様は（特殊な1話を除いて）すべて家父長的に振舞う。その違いは何であろうか。父王が家父長的態度をとるのは、『ぞっとすることを覚えるために旅に出たある男のメルヘン』と『勇敢な仕立屋さん』と『歌を歌う骨』である。それらの課題は、呪われた城で三晩見張りをすること、巨人を征伐すること（一角獣と猪退治）、猪退治であり、比較的難題に近い。これに比べて、父王が家父長的でない『三枚の蛇の葉』と『機転の利く小さな仕立屋さん』の課題は、お姫様の生け贄になること、謎を解くことであり、比較的容易である。このように、違いは課題の困難さの度合いと関係があるかもしれない。しかし、気位の高いお姫様が主人公になっていることが、父王が家父長的態度をとれない一番の理由であろう。

『日本の昔ばなし』では、お姫様は家父長的であるが、1話しかないのだから、『日本の昔ばなし』の特徴だとは言えない。しかし、グリム童話では、父王が家父長的でない二つの話では、お姫様は父王のことをまったく顧慮せず、あたかも自分が王様であるかのように、非常に積極的、能動的に振舞う。お姫様は父王から完全に独立した自立した存在である。こんなことは『日本の昔ばなし』には絶対がない。

第8は、条件結婚の内、課題をやり遂げたらお姫様をやるという課題成就結婚で、お姫様が美しいのは、『日本の昔ばなし』も含めて、（お姫様が登場する）7話の中で、4話である。その内、お姫様の美しさが課題に挑戦する動機となっているのは、2話である。それゆえ、課題成就結婚で、課題に取り組もうとするのは、美しいお姫様をお嫁さんにもraitたいがためだとは言えない。

では、第9番目に、課題に取り組む主人公の動機は何であろうか。前述したように、『日本の昔ばなし』も含めて、お姫様が登場する7話の内、お姫様に惚れたり、好意を抱いて課題に挑戦する話は、2話だけである。これらはお姫様の美しさが動機である。他に、課題に取り組む動機となっているものを列挙すると、ぞうっとする体験をすること、自分の勇猛果敢さの腕試し、運試し、高慢さが1話ずつで、動機不明が2話である。前の3つの動機は、自己実現のためと言えるかもしれない。

次は、結婚生活が幸せかどうかという問題を考察すると、幸せなのは、全8話の中で、1話しかない。それは、王様と農民の娘の結婚の類型2の『賢い農民の娘』である。不幸なのが2話『三枚の蛇の葉』と『歌を歌う骨』である。不明が残りの5話である。条件結婚の内、課題成就結婚は、結婚生活は一般的には幸福でないと言えよう。これが第10番目の特徴である。

以上の特徴は、難題解決結婚との若干の相違はあるものの、難題解決結婚とよく似た特徴である。ところが、

第11番目の特徴は、難題解決結婚の特徴とまったく異なることであるが、課題をやり遂げるのは、課題に取り組む主人公であって、難題解決結婚の場合のように、異次元の世界の存在

や贈物が主人公を助けたり、主人公に代わって課題を遂行したりすることはないということである。これが難題解決結婚と比較した場合の課題成就結婚の最大の特徴である。例外はグリム童話の場合『歌を歌う骨』だけである。ここでは、異次元の世界の小人が登場し、善良な弟に黒い槍を贈る。これが猪退治に決定的な役割を演ずる。ただ、このメルヘンは、条件結婚（の課題成就結婚）に分類しているが、難題解決結婚との境界線上にあって、限りなく難題解決結婚に近い話なのである。『日本の昔ばなし』では、たった一つしかない『鬼の妹』が例外となっている。この話では、異次元の世界の蚊が登場し、その蚊が主人公のぼっくわに謎の答えを教える。だから、実質的に謎を解いているのは異界の蚊である。主人公はほとんど何もしない。これは、課題成就結婚のこの話が同時に動物報恩譚ともなっているからである。しかしグリム童話の『歌を歌う骨』は例外とは言え、主人公は猪退治という課題をやり遂げるために実際に森の中に入って行き、猪と対峙する。難題解決結婚では、主人公が活躍する場合もないことはないが、ほとんどの場合、異界の存在が主人公に代わって難題を解決し、主人公の多く（13話中9話）はただ寝ているだけであったりして何もしない。これは課題と難題では、それを成就する上で、困難さの度合いが違うことに起因するであろう。

さて、条件結婚の内の単なる条件結婚はどうであろうか。この場合は、結婚の条件を出すのは結婚しようとする主人公（ハンス、狐夫人）であり、その主人公が自分の理想像かそれに近いものを提示し、その条件を満たせば、結婚をする。主人公本人の理想に基づく結婚であるがゆえに、父親や母親が登場して、結婚の条件をつけることもないし、主人公がモノ扱いされることもない。また、主人公の結婚相手となる者（エルゼ、若い狐）が、出された条件を満たすために、努力をすることもない。結婚生活は幸せとは言えない。

最後に、条件結婚が『日本の昔ばなし』に一つしかないことの原因を考えることにするが、正直なところ理由はよく分らない。グリム童話には13篇、13組もあって、結婚の話の中で第3位を占める難題解決結婚も『日本の昔ばなし』には、まったく見られない。そのことと関連がありそうである。課題成就結婚も難題解決結婚も、課題や難題をやり遂げてお姫様をお嫁さんにもらう（例外は謎を解いてお后様になる話が前者に1話、難題を解き、王子と結婚する話とお后様になる話が後者に2話）という点では同じである。したがって、条件結婚が『日本の昔ばなし』に一つしかないことの原因は、難題解決結婚が『日本の昔ばなし』に皆無であることの原因と共通すると思われる。つまり、課題成就結婚と難題解決結婚をあわせると、グリム童話には20篇、20組もあるが、『日本の昔ばなし』にたった1話しかないという事実の解釈である。その内訳をよく見てみると、グリム童話の課題成就結婚では、7話の内、お姫様が登場しないのは、謎を解いて王様と結婚する類型2の『賢い農民の娘』だけである。課題成就結婚のほとんどは、庶民の男がお姫様をもらう類型3で、5話もある。難題解決結婚では、13話の内、お姫様が登場しない類型2は2話（『三人の糸紡ぎ女』と『がたがたの竹馬小僧』）だけで、こちらも類型3が8話で、大半を占める。そうすると、グリム童話に典型的に見られるような課題成就結婚と難題解決結婚が『日本の昔ばなし』に一つしかないことの原因を問うことは、突き詰めれば、庶民の男が難題や課題を解いてお姫様をもらうことが『日本の昔ばなし』では例外中の例外なのはなぜか（さらに正確さを期するとすると、殿様家ですら難題、課題を解いてお姫様をもらうことがないことの原因）を問うことと同じことだということになる。ちなみに『日本の昔ばなし』に限定しなければ、日本の昔話にも（『日本昔話大成』や『日本昔話通観』）課題成就結婚はいくつかある。しかし、それは、課題を成就したことの褒美として、

殿様家のお姫様をもらう話ではない。824話、類話を省いても811話も収められている『日本昔話大成』（その中で、結婚の話は108話）ですら、課題成就結婚で、殿様家のお姫様をもらう話は、『日本の昔ばなし』と同じ話の『妹は鬼』を除けば、たった二つしかない。つまり、第7巻の『甲賀三郎＝二人兄弟』と『二人旅』である。その内の一つ『二人旅』は、昔話としては話の展開が十分でなく、また分類もお礼結婚と区別するのが若干困難な類のものである。

庶民の男が難題や課題を解いて殿様家のお姫様をもらう、典型的でありふれたグリム童話の難題解決結婚や課題成就結婚が『日本の昔ばなし』では皆無に近い理由をあえて挙げてみると、次のようになろう。つまり、日本では殿様を頂点とする身分制度がことのほか厳しかったこと（士農工商等）、また家の利害と家の支配が非常に強かったこと（松平賜姓はその一例）、それゆえ、課題成就や難題解決の褒美としてお姫様を妻としてやる、しかも名もない庶民にやるということは、想像の世界でも、馴染まなかったこと、また、庶民にとって殿様（特にお姫様）は余りにもかけ離れた雲の上の存在であり、話の中においてさえ、結婚という形の殿様家との結びつき、殿様家とつきあい、接触は考えにくかったことが考えられるであろう。実際、『日本の昔ばなし』では、庶民の男性とお姫様の結婚はほとんどない。類型3の庶民の男性と長者、殿様家のお姫様との結婚は、『日本の昔ばなし』には、15話、17組あるが、その内、庶民の男性と殿様家のお姫様との結婚は、2組しかない。残りの15組は、殿様家のお姫様ではなく、長者の娘である。『日本の昔ばなし』では、庶民の男性がお嫁さんにもらえる最高のものは、殿様家のお姫様ではなく、せいぜいのところ長者の娘なのである。つまり、庶民の男性にとって、最高の出世は長者の娘と結婚して金持ちになることなのである。また、殿様家の方からすれば、お姫様は、政治権力を維持・増大させたり、家を守ったり、家の格を上げるための政略結婚の道具であり、課題成就や難題解決の褒美、褒賞として、庶民にくれてやるということは、昔話という想像の世界でも成り立ちにくかったであろう。